

〔論 文〕

高齢者に対する知識とイメージ

—女性介護職員と短期大学女子学生の比較—

Mental Images toward the Elderly and Knowledge about the Elderly:
Comparison of Female Care Workers and Female Junior College Students

柴 田 雄 企

Shibata Yuki

ABSTRACT

The purpose of this study are (1) to compare the mental images of the elderly held by female care workers and female college students, and (2) to examine the relationship between their images and their knowledge about the elderly. Nineteen pairs of adjectives were presented to 128 female subjects (84 college students and 44 care workers). The mean age of the college students was 18.5 years, and the mean age of the care workers was 41.9 years. The results showed that the images of the elderly held by the care workers and the college students are similar and that there no significant difference regarding knowledge of the elderly exists between the groups. Moreover, there is almost no relation between mental images of the elderly held by the subjects and the subjects' age and knowledge about the elderly.

Key words: images of the elderly, knowledge about the elderly, semantic differential method, care worker, junior college student

問題と目的

日本人の平均寿命は2002年の時点で、男性78.3歳、女性85.2歳であり（厚生労働省大臣官房統計情報部、2004）、人生80年時代を迎えている。全人口に占める高齢者数も増加しているが、このような中で現代日本人は高齢者に対して、どのようなイメージを抱いているのだろうか。古谷野（1993）は、人々の老人観は、その社会で老人がおかれている状況を反映すると同時にそれを規定し、さらに老人自身の自己概念や適応にも大きな影響を及ぼすと述べている。

高齢者イメージや老人イメージについての研究はこれまでに多くなされてきている。大学生を対象とした研究が多く、保坂ら（1986、1988）は大学生の老人イメージの規定要因として、老人への関心や祖父母との接触など個人の経験に基づく要因の重要性を指摘している。また、滝川ら（1999）は「老年看護学概論」の授業前後での看護学生の高齢者イメージの変化を調査したところ、授業前に比べ、授業後は高齢者イメージが全体的に肯定的方向に変化していたと報告している。

小学生や中学生を対象とした老人イメージの研究もなされている。中野ら（1994）は小学生

と中学生の高齢者との交流と老人イメージとの関連について検討し、年齢が小さい時に祖父母や老人と好ましい経験を多く持っている、現在の老人イメージが肯定的になるとの結果を得ている。また、矢島（2001）は小学生を対象に、老人ホーム訪問体験やライフサイクル授業を受けた経験が老人イメージに与える影響について検討し、絵画テストの結果から、老人ホーム訪問体験によって、児童の描いた高齢者像がより高齢になったと報告している。

中高年者の高齢者イメージについての研究は少ないが、古谷野ら（1997）は中高年の老人イメージを測定し、「中高年齢者の老人イメージは、全体として中立的で、中立点よりわずかに肯定的な方向に偏って」おり、先行研究における大学生の老人イメージより肯定的であったと報告している。

このように高齢者イメージの研究はこれまで様々な年代の者を対象に、様々な側面から行なわれているが、高齢者イメージを高齢者に対する知識との関連から検討したものは少ない。柴田（2004）は高齢者に対する知識と高齢者イメージについて短期大学女子学生を対象に検討した。対象者を高齢者についての知識の高低によって群分けし、高齢者イメージを比較したところ、知識の高い群の方が高齢者について「人なつっこい」、「かわいらしい」、「堂々とした」、「感じのよい」イメージを抱いていた。しかし、これらの結果は日頃、高齢者と接する機会のあまりない者が多いと推測される短期大学生を対象としたものであった。そこで、本研究では短期大学生に加えて、介護職員も対象として高齢者に対する知識の観点から高齢者イメージについて検討することとする。

方 法

1. 対象者

短期大学生84名（女性、平均年齢18.5歳）および介護職員44名（女性、平均年齢41.9歳）を分析対象とした。短期大学生にこれまでの高齢者介護の経験を尋ねたところ、26名が何らかの経験があると回答していた。また、介護職員の平均勤務年数は7.7年（SD=5.2）であった。男子学生および男性介護職員は少数の回答しか得られなかったため、分析対象から除いた。

2. 調査票の内容

(1) 高齢者に対するイメージ

高齢者イメージを捉えるためにSD法を用いた。SD法の形容詞には古谷野ら（1997）が用いたものと同じものを用いた（表1参照）。本研究の調査では、高齢者について「あなたはどのような印象を持っていますか」という質問に対して5件法でそれぞれ回答を求めた。本研究の調査では、高齢者を65歳以上の人を指すと明記した。対象者のイメージ評定は、表1の左列の形容詞に「とてもあてはまる」を1、「ややあてはまる」を2、表1の右列の形容詞に「ややあてはまる」を4、「とてもあてはまる」を5とし、「どちらともいえない」を3として数値化した。

表1 本研究で用いた形容詞対

受動的な	能動的な
暗い	明るい
頑固な	柔軟な
嫌いな	好きな
消極的	積極的
劣った	優れた
遅い	速い
枯れた	みずみずしい
きびしい	やさしい
下品な	上品な
弱い	強い
無愛想な	愛想のよい
地味な	派手な
冷たい	暖かい
鈍感な	敏感な
落ち着きのない	落ち着きのある
騒がしい	静かな
さびしい	にぎやか
不活発な	活発な

(2) 高齢者についての知識

高齢者についての一般的な知識を調べるために、詫摩（1991）の高齢者についての知識調査項目を用いた。○×形式の質問項目13問から成り、1問1点の13点満点とした。得点が高いほど、高齢者についての一般的知識を持っていると考えられる。

3. 調査手続き

短期大学生については2004年6月、短期大学における授業開始前に学生に調査の目的を説明し、調査票を配布し、記入してもらい、その場で回収した。介護職員のうち27名は介護研修（2004年3月）の際、調査票を配布し、後日郵送してもらった。その他の17名の介護職員については職場で調査票を配布し（2005年2月）、後日、回収した。

結 果

1. 介護職員と短期大学生の高齢者イメージの比較

介護職員と短期大学生の高齢者イメージを比較するため、それぞれの形容詞対について、t検定を行なった。その結果を表2にまとめた。なお、高齢者についての知識の得点は、介護職員の平均値が7.05（SD=1.67）で、短期大学生の平均値が6.65（SD=1.75）であった。t検定を行なったところ、高齢者についての知識においては介護職員と短期大学生との間に有意差はみられなかった。

表2 介護職員と短期大学生の高齢者イメージ評定値（標準偏差）とt検定の結果

形容詞対	介護職員 (N=44)	t 値	短期大学生 (N=84)
受動的な－能動的な	2.89 (0.84)	-.76	2.77 (0.77)
暗い－明るい	3.05 (0.83)	2.41*	3.39 (0.74)
頑固な－柔軟な	2.25 (0.84)	-.40	2.19 (0.78)
嫌いな－好きな	3.59 (0.82)	-.57	3.50 (0.88)
消極的－積極的	2.82 (0.87)	1.48	3.06 (0.88)
劣った－優れた	3.16 (0.76)	-1.65	2.92 (0.76)
遅い－速い	2.05 (0.78)	-.35	2.00 (0.64)
枯れた－みずみずしい	2.36 (0.69)	-2.10*	2.08 (0.73)
きびしい－やさしい	3.11 (0.95)	1.07	3.30 (0.92)
下品な－上品な	3.25 (0.61)	.98	3.37 (0.67)
弱い－強い	3.32 (0.93)	-4.44**	2.52 (0.98)
無愛想な－愛想のよい	3.14 (0.80)	1.01	3.29 (0.80)
地味な－派手な	2.52 (0.66)	.29	2.56 (0.68)
冷たい－暖かい	3.77 (0.68)	-.50	3.70 (0.80)
鈍感な－敏感な	2.84 (0.99)	-1.06	2.67 (0.83)
落ち着きのない－落ち着きのある	3.52 (0.88)	2.20*	3.87 (0.83)
騒がしい－静かな	3.75 (0.69)	-1.45	3.54 (0.84)
さびしい－にぎやか	2.11 (0.69)	3.78**	2.63 (0.82)
不活発な－活発な	2.52 (0.79)	1.87	2.80 (0.79)

* p<.05, ** p<.01

2. 高齢者についての知識と高齢者イメージとの関連

(1) 介護職員の場合

高齢者についての知識テストを採点したところ、介護職員の平均値は7.05 (SD=1.67) であった。この平均値 (\bar{x}) と標準偏差 (SD) をもとに、($\bar{x}+SD/2$) 以上を高齢者知識高群、($\bar{x}-SD/2$) 以下を高齢者知識低群、その間を高齢者知識中群とした。高齢者知識高群が18名、高齢者知識中群が10名、高齢者知識低群が16名となった。高齢者についての知識テストの平均値は、高齢者知識高群が8.61 (SD=0.92)、高齢者知識中群が7.00 (SD=0.00)、高齢者知識低群が5.31 (SD=0.95) であった。これら3群の高齢者イメージを比較するため、1要因の分散分析を行なった。その結果、有意差のみられた形容詞対は「劣った－優れた」のみであった (表3)。その他の形容詞対については有意差が見られなかった。

表3 高齢者に対する知識による高齢者イメージの比較（介護職員）

	「劣った－優れた」
高齢者知識高群 (N=18)	2.78 (0.73)
高齢者知識中群 (N=10)	3.40 (0.84)
高齢者知識低群 (N=16)	3.44 (0.81)
F値	3.58*
多重比較 (Tukey法)	低群 > 高群*

* p<.05

(2) 短期大学生の場合

高齢者についての知識テストを採点したところ、短期大学生の平均値は6.65 (SD=1.75) であった。この平均値 (\bar{x}) と標準偏差 (SD) をもとに、($\bar{x}+SD/2$) 以上を高齢者知識高群、($\bar{x}-SD/2$) 以下を高齢者知識低群とした。これらの間の者を高齢者知識中群とした。高齢者知識高群が23名、高齢者知識中群が41名、高齢者知識低群が20名となった。高齢者についての知識テストの平均値は、高齢者知識高群が8.83 (SD=0.89)、高齢者知識中群が6.54 (SD=0.50)、高齢者知識低群が4.40 (SD=0.94) であった。これら3群の高齢者イメージを比較するため、1要因の分散分析を行なった。その結果、有意差のみられた形容詞対は「下品な－上品な」のみであった (表4)。その他の形容詞対については有意差が見られなかった。

表4 高齢者に対する知識による高齢者イメージの比較（短期大学生）

	「下品な－上品な」
高齢者知識高群 (N=23)	3.65 (0.65)
高齢者知識中群 (N=41)	3.22 (0.52)
高齢者知識低群 (N=20)	3.35 (0.88)
F値	3.22*
多重比較 (Tukey法)	中群 < 高群*

* p<.05

考 察

1. 介護職員と短期大学生の高齢者イメージの比較

介護職員も短期大学生も高齢者に対して、「頑固な」、「遅い」、「枯れた」、「暖かい」、「落ち着きのある」、「静かな」イメージを持っていた。

両群の高齢者イメージを比較して、有意差の見られた形容詞対は「暗い－明るい」、「落ち着きのある－落ち着きのない」、「さびしい－にぎやか」、「枯れた－みずみずしい」、「弱い－強い」であった。このうち、「暗い－明るい」、「落ち着きのある－落ち着きのない」は両群とも「どちらともいえない」の3より大きい値であったが、短期大学生の方がより肯定的（「明るい」、「落ち着きのある」）に評定していた。「さびしい－にぎやか」では両群ともに「どちらともいえない」の3より小さい値であったが、介護職員の方がより否定的（「さびしい」）に評定して

いた。「枯れた－みずみずしい」でも両群ともに「どちらともいえない」の3より小さい値であったが、短期大学生の方がより否定的（「枯れた」）に評定していた。最も大きな有意差がみられた形容詞対は「弱い－強い」であり、介護職員が高齢者に対して「強い」というイメージを抱いている一方で、短期大学生は「弱い」イメージを持っていた。この「弱い－強い」という形容詞対についての先行研究の結果をみると、大学生を調査対象とした保坂ら（1986, 1988）では「どちらでもない」より否定的（弱い）に評定されており、中高年を調査対象とした古谷野ら（1997）では「どちらともいえない」より肯定的（強い）に評定されていた。よって、「弱い－強い」の形容詞対における本研究の結果は先行研究の結果と一致している。これらのことから青年は高齢者を弱い存在と捉え、中高年は強い存在と捉えていることがうかがえる。その理由については本研究の結果から特定することはできないが、青年は、加齢に対して自分が現在、持っている精神的、身体的若さを喪失するというイメージを抱いており、中高年は、若さを喪失していくことを単に弱くなっていくことと捉えるのではなく、人生経験を重ねて得るものがあり、強くなっていくと捉えているのかもしれない。高齢者イメージを「弱い－強い」という形容詞対で評定する際に、青年と中高年とでは連想する内容が異なっていることが推察される。

両群間で有意差のみられた形容詞対は5つあったが、有意差のみられなかった形容詞対の方が多かった。この結果から、介護職員と短期大学生の高齢者イメージにはそれほど大きな差異はないと言えるだろう。介護職員の方が高齢者に接する機会が多いと思われるが、日頃、介護職員が接しているのは、高齢者施設に入所、あるいは通所している高齢者である。施設に入所している高齢者の9割近く、そして、在宅介護を受けている高齢者の約2割が認知症高齢者であるとの報告がある（生活情報センター編集部, 2004）。このことから、介護職員が日頃、接しているのは認知症高齢者が多いと推測される。そして、本研究の対象者には、柴田（2004）での調査と同様に高齢者に対する知識とイメージに加え、認知症高齢者に対する知識とイメージの評定も求めた。そのため、本研究の調査で求められた高齢者イメージの評定に際して、介護職員は勤務中に接している高齢者のことは除いて考えたのかもしれない。このことも本研究の結果に影響している可能性があると思われる。

また、介護職員と短期大学生とでは、平均年齢が異なっていた（18.5歳と41.9歳）。古谷野（1997）は中高年（平均年齢54.0歳）の高齢者イメージについて研究し、先行研究において報告されている日本の大学生の高齢者イメージより肯定的であったと述べている。そして、幼児期に肯定的であった高齢者イメージが、青年期に最も否定的になり、その後、肯定的に変化していくという高齢者イメージの加齢変化の仮説を示している。しかし、本研究の結果からは青年期にある短期大学生より中年期にある介護職員の方が肯定的な高齢者イメージを抱いているとは言えず、この仮説を支持する結果は得られなかった。

統計学的検定は行っていないが、古谷野（1997）での中高年の高齢者イメージより、本研究での介護職員の高齢者イメージの方が否定的に評定された形容詞対が多かった。古谷野（1997）において評定値が3.00を下回っていたのは、「受動的な－能動的な」、「頑固な－柔軟な」、「遅い－早い」、「地味な－派手な」の4つの形容詞対のみであり、2.50を下回った形容詞対はなかった。これには古谷野（1997）の対象者が住民基本台帳から無作為二段抽出された一般中高年者であるのに対して、本研究の対象者が介護職員であるということが影響しているのかもしれない。古谷野（2003）によると、「専門職を含む、サービス提供者の高齢者観は、一般の

人々と大差なく、全般に否定的で、重介護を要する高齢者にサービスを提供する機会の多い人ほど特に否定的だとされている」とのことである。本研究の対象者である、介護職員は要介護高齢者と接しているために、一般中高年者より否定的な高齢者イメージを抱いていたのかもしれない。このことも高齢者イメージの加齢変化の仮説が支持されなかったことに影響しているかもしれない。

2. 高齢者についての知識と高齢者イメージとの関連

結果より、高齢者についての知識と高齢者イメージとの間にはほとんど関連がみられなかった。本研究で有意差がみられた形容詞対は介護職員と短期大学生において1つずつだけであった。介護職員においては、知識高群の方が知識低群より、高齢者に対して、「劣った」イメージを持っていた。短期大学生では、知識高群が知識中群より、高齢者イメージを「上品な」と評定していた。しかし、知識低群のイメージ評定値は知識中群と知識高群の間であったことから、知識が高いほど「上品な」イメージを持っているとは言えない。

柴田（2004）では、高齢者知識高群の方が、高齢者知識低群より、高齢者に対して、「人なつっこい」、「かわいらしい」、「堂々とした」、「感じの良い」イメージを持っているという結果であった。これらの形容詞において、高齢者知識低群が高齢者を「どちらともいえない」と捉えているのに対して、高齢者知識高群はより肯定的に捉えていた。そして、高齢者について正確な知識を持っている者の方が、持っていない者より、高齢者に対して親しみを感じているということが推察された。

しかし、本研究では柴田（2004）と同様の結果は認められなかった。このことの原因として、柴田（2004）で用いた形容詞対と本研究で用いた形容詞対が異なるということが考えられる。柴田（2004）では林（1978）による特性形容詞尺度を用いたが、本研究では古谷野（1997）で用いられた形容詞対を用いた。

高齢者について誤った知識を持ち、老いを実際より否定的に捉えていれば、高齢者イメージも否定的なものになると思われたが、本研究では高齢者に対する知識と高齢者イメージとの関連は見られなかった。高齢者イメージには「老人と話す機会」、「老人や老人問題に対する関心」（保阪・袖井、1986）や「祖父母との会話」、「祖父母の思い出」、「祖父母以外の老人との接触」（保阪・袖井、1988）、性差、学歴差（古谷野ら、1997）が影響することが報告されている。今後はこれらの要因も含めた検討が求められる。

引用文献

- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），25，233-247
- 保坂久美子・袖井孝子 1986 大学生の老人観 老年社会科学，8，103-116
- 保坂久美子・袖井孝子 1988 大学生の老人イメージ—SD法による分析 社会老年学，27，22-33
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 2004 平成16年 我が国の人口動態 平成14年までの動向，財団法人厚生統計協会，p. 33
- 古谷野亘 1993 老いに対する態度（柴田 博・芳賀 博・長田久雄・古谷野亘編）老年学入門：学際的アプローチ，pp. 177-184 川島書店
- 古谷野亘・児玉好信・安東孝敏・浅川達人 1997 中高年の老人イメージ—SD法による測定— 老年社

- 会科学, 18 (2), 147-152
- 古谷野亘 2003 高齢期をみる目 (古谷野亘・安藤孝敏編著) 新社会老年学 シニアライフのゆくえ, p. 23 ワールドプランニング
- 中野いく子・冷水 豊・中谷陽明・馬場純子 1994 小学生と中学生の老人イメージ—SD法による測定と比較— 社会老年学, 39, 11-22
- 生活情報センター編集部 2004 老後の生活設計を読み解くデータ総覧 (2004) 生活情報センター, p. 23
- 柴田雄企 2004 短期大学女子学生の痴呆性高齢者イメージと高齢者イメージ 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 42, 59-66
- 滝川由美子・吉本知恵・横川絹恵 1999 看護学生の高齢者イメージの変化—老年看護学概論の授業前・後の比較— 香川県立医療短期大学紀要, 1, 51-60
- 詫摩武俊 1991 これからの老い 老化の心理学, pp. 14-15 講談社
- 矢島直子 2001 児童の老人イメージに関する研究—体験学習による老人イメージの変容について— 学校メンタルヘルス, 4, 87-93

謝辞 本研究の調査にご協力いただきました皆様に深謝いたします。